



猫はネットに
飛翔する。

浅川恵菜

夜も9時。ようやく帰宅すると、なぜか、部屋に灯りがともっている。今日は月末恒例の本社で会議のあった日だ。変則勤務のオレだったけど、この日だけは職場に行かずに、本社へ出勤する。

オレ、ちゃんと電気消して出勤したよな？・・・てことは、これはふさこだ。アイツ、紐が好きで、いつも6畳間の蛍光灯の紐にジャンプして、オモチャにしてる。あー、またかよ。くだらん電気代、払ってるのはオレだけ？

オレのアパートは、6畳一間と、4畳半のDKが付いて、基本、ペット不可。しかし、都合のいい事に、このアパートには大家さんが住んでないので、ほぼ、住民の意識に依存してる。

なにもともかく、鍵を開けて、猫どもに「ただいまー」と告げる。

そんなことは分かってました、とばかりに2人の猫供が、玄関先でオレを迎える。

にゃーにゃー。「つか、早く帰ってこいよ。お腹空いたー！ゴハンー、ゴハンー」

はいはい。この辺は、最早、猫の下僕。ビジネスバッグを床に投げ出し、いの一冊で子供達にゴハンを与える。てか、オレのメシ。切なくもコンビニ飯。でも、まあ、猫供がキチンとゴハン喰ってるなら、それでいいか。猫バカとして考える。こうやって、灯りともしてオレを迎えてくれるのは、もしかして、猫供の愛かな・・・？　いあ、オレやっぱアホだな。

缶ビール1本と、コンビニ飯。30も幾つか過ぎて、これで、いいんだろうか？　いあ、いいんだ。オレには猫たちがいる。

上のコはふさこ。長毛でふさふさ。で、真っ白け。お年はようやく10歳になるかどうか。初めて逢った時はあまりにも小さくて、ちょっと後悔した。こんなちびちび、ちゃんと育児出来ないってば。当時、カリカリを食べられるくらいだったから、仕方がなく、カリカリを出しっぱなしな状態で、ナンとかココまで来た。

下のコは、黒ぶちのくろちー（そのまんやないか）。　ふさを飼っている事を知ってる知ってる友人に、「もう1匹くらい、平気だよな？」って押し付けられた。ふさは女の子。くろちーは男の子。心配したが、案外簡単に和解して、それぞれの地位に付いたようだ。例えば、眠る時、オレの枕元にはふさが来て、足元でくろちーが丸くなってる。

モノの本によると、如何に飼い主の顔の近くで眠るのかどうか、猫的順位らしい。てことは、ふさのほうが、上位なんだから。

30過ぎ、と言ったが、これでも、色んな修羅場を歩いてきた。オレが大卒で就職したのはバブルもはじけて、氷河期とか言われた。けど、まだマシな頃で、なんとか、新卒で就職できた。しかし、今は、半派遣で、本社の意向に寄り、あちこち飛ばされてる。その間には、そりゃ、色っぽいハナシもあったけど、派遣で、オマケに覚悟も付かないオレは、こうして猫と酒を酌み交

わす、情けない、いあ、りっぱな、猫バカになった。仕事はキチンとするけどさ。オレはA型だからね。

……。缶に残ったビールをすすっていると、長年連れ添ったノートPCが立ち上がっているのに気が付いた。

へ？ 一応、PW設定してあるから、オレ以外の人間が立ち上げるの、不可能なはず。でも、モニターが「ようこそXPへ」って、しゃべってる。

なんだ？ つか、誰？ ……落ち着けオレ、ここまでは、電源さえ入れれば、誰でも到達できるじゃないか。

そのままIEを起動する。

フツーにヤフーのトップ画面が開く。ログインしてる状態。あー、これはオレの設定。これは普通、普通。

こんなこと出来るの、誰だ？ もしかして、ミキ？

……。疑問もあるけど、（軽く酔ってたし）いつも覗いてるサイトをうろついて、日付が変わる頃に、眠りに付く事にした。オレが布団に入ると、猫供はまるで子守をするか様に布団に押し寄せてくる。

あー。オレはこれでいいんだ。

その2

オレの今の立場は、一応正社員。しかし、チームをつかって、客先の企業に、派遣社員として、送り込まれる。

ミキも、そんな境遇のスタッフだった。会社は違うけどね。

オレたちは客先の要求に対して、全て応える。システム構築の場合もあるし、カスタマーサービスの時もある。

ミキに逢ったのは、たしか、官庁の文書作成業務に当たってる時。

ミキは、若くて、ちょっと小柄だけど、スタイルも良くて。でも、ツンッと澄ましてて、故に、職場内の男子の意見もかなり割れた。

彼女は、庶務的業務をこなしつつも、PCもそつなく操ってて、なんかそこに、ミキなりの矜持が感じられた。男子達は、その、ちょっとお高いお堅い態度に、「あんなオンナつまらん」「いあ、アレがオレの思い道理に出来たら、凄くね?」「いっそ、女王サマにお使える身分でもイイ」

・・・オトコのプライドって、どこにいったのかね? オレ? オレは、仕事してて対等に渡り合えて、与えられた仕事は120%のチカラでクリアしていくミキに、同士、として、リスペクトしてた。入社したての坊やじゃ、ここまでできない。仕事の上では、オンナもオトコもない。

職場の飲み会で、しこたま酔ったミキをマンションまでタクシーで送ったのは、逢ってから何ヶ月たってたんだろ? つか、いくら仕事できても、呑みで、オトコと張り合う必要ないって。そこが、オレはなんとなく好ましい。

酔って、マンションの鍵も開けられないミキのかわりに、オレが開けてやると、玄関先になにかいる。ねこだ。

黒と白のぶち。かーさんの気配を感じて出てきたんだけど、今日はなんかシラナイヤツがいる。

「・・・うううう」

小さくうなる。こいつ、どうすればいいんだよ? おい、ミキ? 大丈夫か?

「へいき。そこにあるふくろから、ゴハンだしてやって・・・。」・・・爆睡。こーなったらしかたがない。スーツ着てるままだけど、とにかくベッドにつれてかなきゃ。

部屋は、想像してたのと全然違った。正直驚いた。もっと、無機質で、ただ眠るだけの場（

オレがそうだからね。)かと思ってたのに、植物が置いてあって、熱帯魚飼ってて、インテリアもナチュラルな感じ。ミキが普段纏ってる雰囲気とは間逆。

とりあえず、ミキをベッドに寝かしつけて、黒ぶちにゴハンを与えながら、「オレ、おまえのかーさんを寝かせてやっただけだからな。ちゃんとかーさんに伝えとけよ?」といいつけて、部屋を出て、鍵をかけて、ドアに付いてる新聞受けに鍵を放りこんだ。

思えば、この時、オレは恋に落ちてたのかもしれない。

その3

翌朝、職場のフロアで、ミキとすれ違った。「昨日はありがとう」 え？

「マイコにゴハン上げてくれたのね。悪かったわ。」 あの黒ブチ、マイコって言うのか。

「・・・覚えてるの？」 「もう、あんな事しないから。」

思わず、振り返る。でも、ミキは何もなかったように、いつもの澄まし顔で去っていった。くそ。オンナって、どうしてあんなんだ？

いあ。オレは自分の気持ちを喉の辺りで繰り返しながら、ちょっと、驚愕してた。ミキのことを女として見たの、初めてじゃないか？・・・そんなことは、どうでもいいや。今日はプロジェクト再検査じゃないか。オレのタイピングは問題ないケド、クライアントが何を突付いてくるのか分からない。緊張、緊張。

結局、作成した物は間違っていなかった。しかしクライアントは「ココが欠けてる、ココにコレを追加してくれ、それから・・・、」と、いまさらな要求ばかりしてくる。同じ会社から派遣されたチームの同僚達と、ソレとは分からない程度の、でも、深く長い溜息を交わすと、無言で作業に入る。キーを叩きつつ思うのは、（ふさのゴハン、足りてるだろうか？）だった。そしてなんとなく、ミキのことを考えた。PCで作業をする人種の特徴として、キーを打ってて、間違いなく入力してても、ココロの中ではまったく別のコトを考えられる。まったく、器用というか、職業病というか。

帰宅する。あーあー。今日は10時だよ。「ただいまー、ふさー？」

玄関先。ふさこはちんまりと座ってた。そしてオレを見上げると、 にやうにやう！

「マコト、下僕のクセに、どうしてこんなに帰りが遅いの！ゴハンないよ！」

はいはい・・・。下僕は自分のメシよりも猫のゴハンを急いで用意する。ふさがカリカリしてる間に、水用の皿をキレイに洗って、新しい水で満たして置いてやる。ついでに、2箇所においてある水用のミニバケツの水もバケツを洗い新しく入れ替えてやる。ゴハンが切れても、水だけはいつでも飲めるようにしとかないとな。

「ふふっ・・・」 やっぱ、下僕だ。オレ。

その4

考えてみると、どうしてふさこと同居することになったのか、上手く説明できない。

大学を卒業して、初めに入った会社が、実家からだ通勤1時間半位掛かることを理由に、1人っ子で長男で、溺愛されてた（今更になって、分かるコトだけどね。）のに、1人暮らしを始めた。6畳一間、それに4畳半の玄関、キッチン、ダイニング兼の、しかし、バスとトイレは別の物件を探し当てられたのは、僥倖だろう。これで、家賃は相場よりも安いと来てる。

まだ若かったから、仕事こなしつつ、自炊もして、けど、日々の忙しさに、プライベートは寂しい限りだった。基本、呑みとかは参加しない主義で、だから、こうなってしまったのは自分のせいだし、別になんとも思ってたなかった。

そんな生活を1年程続けてたか。

そして、ある朝、玄関を開けると、真っ白白の仔猫が座ってた。は？

そいつは、ためらいもなにもなく、尻尾を、ピン！、と立てて、まるで貴婦人のように、そして当然のごとく、ウチの玄関に上がりこんだ。

なんだこれは？ アタマの中、？でいっぱいになる。しかし、こっちは出勤しなきゃならない。

「おい、ここはおまえのウチじゃないぞ？ 出てけよ」ヤツは無反応。座り込むと毛づくろいをはじめた。

「オレんちはペット禁止なんだよ。」出勤まで、時間が迫ってくる。

なにを言っても無反応な仔猫。しかたない……。帰ってきてからどうすっか考えよう。

当時、外資系の企業の営業をしていたから、そんなに切羽詰まった業務ではなかった。仕事っていても、ただの鞆持ちだったから、上がりも社則通りに5時半には退社できたし。（新人だからね。）

帰りしな、本屋に寄って、仔猫の育て方の載ってる雑誌を貪り読んだ。それからドラッグストアによって、当座のゴハンとしてカリカリと猫缶（この表現は好きじゃない。これではまるで猫肉の缶詰ではないか？）1つづつ購入した。

ガキのころ、猫好きだった母は、いつでも、猫を飼っていた。＝猫の居ない生活がどんなに侘しいのか、教え込まれたような気がする。

もはやこの時点で、あの白猫を追い出すことは念頭になかった。とにかくゴハン与えて、ウチのコにしちまおう。

仔猫を育てる為には、時間を決めて、きちんと計量したフードをあたえる。どの猫雑誌を見ても、そう書いてある。今はいい。でもこの先、ホントにそんなこと可能なのか。

いあ、しかし。出来る限りのことはしようじゃないか。

しかし、ヤツをウチに押し付けたのは誰なんだろう？ オレの部屋は2階の、ソレも端から3番目で、表札すら出してない。（あたりまえ）。だいたい階段もニンゲンサイズで作ってあるから、アレを自力で登ってきたなんてありえない。

ヤツは長毛で、ぶっとく短い脚をしている。これであの階段を登ってこられたのか？・・・。

帰宅して、カリカリと缶のフードと、冷蔵庫にあった牛乳を皿に出してやる。ヤツはふんふんと匂いをかいで、牛乳をひと舐めしたあと、カリカリに喰い付いた。

正直云ってありがたかった。これなら、24時間だしっぱでも、なんとか喰ってくれる。

その5

ちびは、下痢がひどかった。長毛なので、お尻の周りの毛がいつも汚れてた。だから、出勤前に食事をさせて、排泄を確認した後、キャリーバッグに詰める。

オレはどんなにがんばっても、夕方6時半くらいにしか帰宅できない。その間、汚れたままで、ベッドにあがられたら、どうもこうもない。

「悪いな。」そう告げて、キャリーバッグのロックを締める。けど、フードも水も入れてある。頼むよ。

こんなだから、仕事が本格的に忙しくなってくると、どうしてもちびのことを考えて、耐えられなくなってきた。けど、ちびはいつの間にかオトナになってて、そんな心配も実は不要、だったのかもしれない。

いつも、下痢して匂うから、臭いコ＝くさこ。でもそれでは可哀相だから、ふさふさの毛並みから、ふさこ。なんちゅー安直。いあ、しかし、命名とはこんなもんだと。

ソレ、に気付くまで、そんなに時間はかからなかった。ウチにきたときから、ふさこは首輪をして、鈴じゃなくて、妙なモノを首輪に付けてた。

四角くって、真ん中辺りに切れ目が入ってる。引っ張ってみると包丁を鞘から抜いたように金属製の部品が付いてる。

むー？ あちこち眺めると、ソレはUSBの差込口によく似ていた。こんなもん、見たことがない。それに、なんで、猫がこんなもん、着けてんだ？ 首輪から外す。・・・もしかして、コレ自体がメモリなのか？

まあ、いいや。って、オレはそのヘンに投げ出した。

ふさの生活。そしてオレの生活。それを考えると、当時努めてた会社は、オレを駒の様に扱っていた。我慢できるのがオトナなら、オレはまだ学生気分なんだろう。それで、2年耐えたけど、オレからけじめを付けて、さよならした。

その直後景気が急速に悪化して……。行く宛を喪ったオレは今の会社に、なんとか拾って貰った。

それが2年前。

それから、いくつかの派遣先をやり過ごして、今は、官庁の文書作成業務にあたっている。そ

して。

ミキだ。

正直、オレは、オンナとは遣って行けない事を、知らぬ間に自覚してた。だって、そうだろ。背はオトコにしては足りない。見た目も、フツー。何にも誇る点はない。あ、一つ自慢できるには、猫バカってことかな。

数日後。

ミキは相変わらずの澄まし顔だ。好意もなにも、感じる隙も見せない。なのに。

すれ違いざま。

「あなたも猫飼ってるの？」・・・意外。

「ああ、もうオトナだけだね。」

「・・・そう。」

「もう避妊手術受けてる。」

「猫ばか」　くす。

「慣れてるし」

通り過ぎた後、どうして猫を飼ってるのかが分かるのか？と思った。何気なく肩の辺りを見ると、立派な猫毛が、しかもべったり張り付いてるのを見つけた。もしかして、オレの気が付かない所にも付きまわってるのか？

でもしかし。・・・これって、どう受け取ればいいんだ？　オレにはわからない。ミキんこの猫、たしかマイコって。メスだよな？

あんな都心に住んで、出入り自由なんて考えられない。

つか、自分チの環境から想像するに、いつだって、交通事故の可能性が高い。だから、大枚払って、避妊手術をしたんだ。

だからオンナは嫌なんだ。こうやって、人の心をもて遊ぶ。

でも、キライじゃない。なにがそう思わせるんだろう？・・・猫か？

もはや、バブルは過去の栄光。当時は青田刈りとかあって、いろんな伝説を残した。面接後、カツ丼を振舞われたとか、夕方呼び出されて、呑みに連れてかれたとか…。

そんなの、今の氷河期に居る身分には、ありえない話のように感じる。最もその頃は高校生くらいか。

それにしても、今のクライアントは、ヒトをナンだとおもっているのか？
指令のまま文書を作成する。そして、前言翻すかような添削のアラシ。

よく言われる。SEはデスマーチだと。会社の指令だから、何とか耐えてミッションをこなす。でも職場では、まるで気まぐれのように、作業内容を変更される。（てか、オレ的に、会社と、派遣先＝職場と固有名詞を換えてる）

その度に、ワードとお友達になる。個人的にエクセルの方が組しやすく好ましいが、クライアントは「ワードで」と指示してる。

ワードって深いんだよな。やろうと思えば、どんな事でも出来る。しかし、クライアントは、「ワードで閲覧できる文章を」ってのが依頼の趣旨なので、そう、まるで、好きでもない女に媚を振りまいてるかのような、下らん作業内容。けど、これで、メシ喰ってるんだからな。ましてや、オレのチームには妻子持ちがいて、ほんとに、痛み入る。オレみたいにお猫さまの為にシゴトしてるのとは、レベルがかなり違う。

そんなくだらない日々が続いてるなかで、他所の会社から派遣されたチームが、契約満了で移転するのを送る飲み会があった。

そんなに心配はしてない。けど、またこの間のように、ミキが泥酔しないように、オレはなんとなく気をくばってた。

なにがそうさせるのだろう。普段は陶器で作られたような澄まし顔なのに、呑みになると、いきなり体育会系なノリで、ガンガン呑む。けど、強くはないから、こっちが気をつけてないとたちまち泥酔してしまう。云いたかないが、コイツちゃんを見てないと、限界を軽々と越えてしまう。

あぶなっかしい。普段が普段だけに、見てもらえない。
てか、気にしてるオレって、なんだ？

その7

いわんこっちゃない。ミキは今夜も泥酔。送ってく男子は、運が良いのか悪いのか、オレしかない。なんとかかかついで、タクシーに押し込む。そして、マンションへ。

あー、何年ぶりだろね。マイコ、お前に逢うのは。

悪いけど、おまえのかーさんは今日も泥酔だよ。ゴハンは上げるから、ちょっと我慢しててくれ。

制服が解除されて、女子の服装はかなりダウンした。でも、中身は変わらないから、いっそ、今の方がミキは女らしくて、オレはだらしなくも躊躇した。てか、普段のミキとは、違う、気がした。

苦労してベッドに押し込むと、うっすらと目を開けて、

「もう、帰っちゃうの？」とのたまった。

「まったく、どうしてこんなに呑むんだよ？」

「・・・だって。負けられないもん。」

「それ、なんて云うか知ってる？」

くるん、と寝返りを打って、「知らなーい」

「バカ、っていうんだよ。」

「バカでいい。一緒にいて？」

・・・本気か？

「マイコがみてるし。オレ帰るよ」

マイコのゴハン皿にフードを満たしてやると、文句を云いつつ、カリカリしてる。オレもふさにゴハンやらなきゃ。

いあ、男子として、なすべき事は他にある気がする。でも、それは校則に反するようで、居心地わるかった。

あれはナンだったろう？

あの日から3日は経っていた。しかし、ミキは相変わらずの澄まし顔。

もし、あの時、ミキを抱いてたら、オレは今よりも変わったかもしれない。でも男子として、敵の弱みに付けこむって、なんか違う感じがする。

ゴハンを与えながらふさこに問う。

「おとーちゃん、なんか間違ってる？」

「よろしいんじゃないくて？相手の弱みに付け込むのは、紳士としてどうかと思いますわよ？そこで実行してたら犬以下でしょうね。」

・・・おまえ、猫年齢で4歳だろ？なんでこんな辛辣なんだ？てか、もっと聞きたい事がある。「おまえにUSB付けたの、誰？」 今なら、アレが何だったのかが分かる。こないだ、ジャングルになってるテーブルから転げ落ちてきたからだ。思い出すのには時間が掛かったが。

にゃーんにゃーん。

はいはい。もともとこの会話はオレの妄想でなりたってるからな。

市販されてるUSBメモリ（外付けのやつね。）12Mb前後。面白半分にオレのPCに挿したら、ふさこがぶら下げてきたメモリはオレのPCなんて足元に及ばないほどの容量があった。ちょっと待て。オレのPCはちと古いが、あの時代に、コレはないだろ？

しかも4年前。詳しい事は殆ど覚えてないが、4年前って、当時売られてたPCの外付けHDだって、そんな巨大な容量があるはずがない。

その時、何か不可解なプログラムがPCにインストールされるのを感じた。しかし、一瞬。何がインストールされたのか、履歴を見ても判然としない。単なるグラフィックなのか？いあ、違う、もっと重い、大きな、なにか・・・。

ふさは、毛づくろいが苦手だ。仕方がないので、長毛種用のコームで梳いてやる。こうでもしないと、出勤前にすりすりされて、スーツが毛まみれになるからだ。こうやって梳いてやれば、毛球症を防ぐことにもなる。

しかし。こうやって、猫の面倒をみていると、ふと、ミキンチのマイコが気になる。ミキは残業

も厭わず働いて、帰宅は9時回るのは当たり前だ。同じ猫飼いとして、それが猫的に辛抱できるのか、何とはなしに気になる。

マイコはきちんとゴハンを貰ってるのか？・・・てか、なんで、他所んちのコが気になるのかね？

猫ラバー？ いあ、ただのバカだ。

ふさこが避妊手術を受けた時。

初めて発情の声を聞いた時、かなりとまどった。なんか文句でもあるのか、って。

何が気に入らないのか？ ゴハンだって盛り盛りだし、トイレだって、キレイにしてやってる。なのに、今まで聞いた事のない声で、普段はそんなにおしゃべりじゃないのに、夜中に甘ったるい声で遠吠えする。

本屋で、猫雑誌を読み漁って、ようやくそれが「発情」だという事に気が付いた。

運がいいことに、歩いて行ける距離に猫病院があって、土曜に預けて、日曜の午後に引き取りにいった。

「2万5千円です」

猫医者は、常識の様に言い放った。

料金を支払いながら、オレは今後のふさこの医療費について考えてた。

オレはタバコを吸わない。酒もそんなに飲めないし、たいした道楽もない。ただ、貯金の必要性について考えた事は無く、なにも考えないまま、金を遣っていた。オレはそれでいい。しかし……。

ふさこの為に蓄えをしよう。帰り道、決意をした。そうすれば厄介な病気になった時に足しになればいい。毎月……5千円。これはふさこの為。猫バカとしては、自分の為でもある。

1つ分かって欲しい事がある。仕事でPC使ってる、家に帰ってもヘビィユーザーなSEは珍しい、ってこと。たいていのヤツは、必要最低限の機能のモノを使ってる。大体、ずーっとモニターと睨めっこして目がしょぼしょぼしてるのに、せめてプライベートでは、無縁でいたい。ただ、会社からの指示がEメールでくるから、仕方なしに置いてる。そこに愛なんてない。逝っちゃったら、また新しく買い換えるだけだ。そう、まさに、日用品だ。

そんな訳でオレのも電気屋で叩き売ってる様な、どうでもいいノートだった。テンキーが無いのが不便と言えば不便だったが、そんなのは慣れた。ただ長文を打つ時、職場ではちゃんとしたキーボードだったから、ノートでは、ミスタッチが多い。しかしそれでさえも、慣れてしまえば些細な事だ。

唯一不安があるといえば、MSがいつまで今のOSのサポートをしてくれるのか？という事だった。

今の職場とは、2年の契約だ。大体後、1年。

何気なく、カレンダーをぺらぺらとめくっていた。もちろん、猫のカレンダーだ。ふさこはかわ

いい。でも、他の猫もまた、かわいい。

そうか。

オレは来月、28になる。

ミキは、マイコは、何歳だろう？

あと、一年。

これで、今のうっとおしい、文書作成業務とおさらば出来る。しかし、次はドコに派遣されるのか？ そんな事は会社の営業以外に分かる者は居ない。

しかし、オレは、SEとして、つか、兵隊として歳を喰い過ぎている。

会社的に、「若くて、ヘイタイに適してる」のは、20代前半だろう。それにしたら、重ねて言うが、オレは歳を喰い過ぎてる。これで、妻帯者だったら、会社の評価も変わるだろうな。

しかし、オレは独身で、守るものって言ったら、ふさこくらいしかない。それ位、オレのプライベートは虚無だった。

ところが。

ミキ。

すれ違いざまに、珍しく声を掛けてきた。

「ねえ？」

何だ？

「野上さんて、猫飼ってるんだよね？」

「何？」

「もう1人位、平気でしょ？」

なんだそれ？

でも、猫を人間扱いしてる所に、好意を感じたのは否めない。

「マイコ、子供できたの。もう1人位、平気よね？」なんでそう云うか。

「どうしたのさ？」

「貰って。あたしが届けるから。」

それって、オレんちに、来る、って事か？ なんでそんな話になるんだ。少し考える。

「・・・構わないケド、オス？メス？」

「男の子。他の子はなんとか引き取り先見つけたけど、このコだけ、決まってないの」
・・・マイコが妊娠したのか。なんとなく微妙な気分になる。

「あんな都会で、出入り自由だったのかよ？」
思わず、キツイ言葉を投げかける。

「貰ってくれるのね？ 今週の土曜日、届けるから。」

・・・自分のコドモのその又子供だぞ？ 悪いけど、ミキのメンタリティを疑った。オレはふさこに金掛けて避妊手術をした、つーのに・・・。

あんな都会。しかもウチの目の前に国道が走ってる。オレだったら耐えられない。だって、いつ交通事故に逢うのか、不安でたまらないよ。

でも、ミキが猫のフードに付いて、「ゴハン」と言うことに親近感を感じてた。ホントの猫ラバーなら、「餌」ではなく「ゴハン」だろ。それくらい、猫はいとおしい。

・・・しばらく、でも、数秒。
「いいよ、連れてきな。」

オレは単なる猫バカだ。

ミキがやってくる。

しょうがない。掃除するか。

下らん、オトコのプライド。でも、ふさこが、変なモン、口にしない程度には片付いてる。だって、紐とか飲み込まれたら、それは大事件だ。また、あの猫医者に掛からなきゃいけない。

見られて困るもの、そんなモノは何もない。オレは猫ラバーだからな。あったとしたら、カレンダーくらいだ。けど、こんなもの、猫好きなら普通だろう。

とりあえず、ごちゃついでる（ビールの空き缶とか）は片つけた。

仕事は相変わらず続けてる。そして、約束してた土曜日が来た。

しかし、どうやって、オレの住所を調べたのかね。電話で、簡単に住所を告げると、あっさりと理解したようだ。

ピンポン。

「連れてきたわよ。」

玄関、開ける。そこにキャリーバッグを下げたミキがいた。

・・・これって、凄いことかもしれない。いあ。オレは唯の里親だし。カゴから出てきた子供はマイコそっくりな黒ぶちだった。それより。

事態の変化を感じて、ふさこが出てきた。ミキは。

「可愛いー！」なでなで、クリクリ。

やっぱ、こいつ、猫バカだ。知らないニンゲンに対して警戒してるふさこのご機嫌を取ろうとしてる。

「野上さんて、こんな可愛いコがいたら、人間なんてどうでもいいでしょ？」

・・・。

「マイコに手術させなかったのかよ？」

玄関先で、ぺたん、と座り込む。

「・・・だって。・・・あんな小さいのよ？手術なんて、痛そうで、可哀そうじゃない……」

ただでさえ、小柄なミキ。それが、オレの言葉で小さくしおれている。まるで、母親に叱られて、ぐずってる小学生の女の子みたいだ。

「や、悪くはないさ。けど、気にならね？」

「だって、あんなに外に出せって言うんだもん・・・。」

それは解かる。だから、ふさこも完全室内飼いにしたんだし。

そうか。ある意味、オレ達(?)、同類だ。

名前。悩んだ挙句、くろちーに決定。だって悩めば悩むほど、浮かんでくるのはどこかの有名人が飼っているコの名前しか思いつかない。それは失礼だろう。なので、くろちー。・・・まったく安直だな。オレって。

変わったもの。それは、ミキ。

前みたいなすれ違い様にしゃべるのではなく、オレのデスクまで来て、1言、2言、溢すようになった。

そりゃね。自分チのコが養子に行ってるんだから、気になるのはしかたがないよな。困ったのは同僚。

「なんで、ミキちゃんがオマエんところ来るんだよ？」

・・・なんて答えれば満足するんだ。

「あ、彼女から仔猫貰ったんですよ。だから、気になるんでしょ？」

「そーかー」・・・納得してない。それくらい、ミキは魅力ある女子だった。今更、自覚。

ふさこ、新人君嫌い？

「それでもありませんわよ。彼、自分の地位を自覚してるから、あたくしとしても、気にはならないの。」

「ちゃんと去勢手術うけさせるよ。約束する」

「ありがたいわ。その方があたしくしと上手くやれるんじゃないか？」

猫バカ。多分、こう言うだろうって、オレの妄想で成り立ってる会話。しかし、くろちーに手術させることは決めていた。

あ、てことは、マイコ、1歳くらいか？

フロントライン、きちんと投与した。だから、もう、同居状態にしてるケド、本質的にはふさこはくろちーのこを受け入れてない。隙があれば、全身で威嚇してる。たのむよ。施術できるまで、もうちとかかるけど、それまでに仲ようしてくれよ。そう、あと3ヶ月くらい？

そうすれば、去勢手術を受けさでてやれる。これで、「オカマ」になったコなら、ふさこも受け入れるだろう。しかし、これは下僕のメンタリティ。現実はどうなるのかね？

くろちーがウチにやった来たことで、ミキの冷淡さはどこかに行ってしまった。

猫ラバー。根拠は無いけどミキはやっぱそんな属性を持っていたことになる。いあ、オレとして(猫ラバーとして)それは大変、好のましかった。しかし。

また、移動するチームの送別会があった。毎度のことながら、オレはいらん心配をする。しかも、またもや的中。

なんで、そんなに呑むんだ？負けられないって、そんなこと、誰も評価しないってば。しかも、ソレはオレの仕事になってる。

「まったくさ。」

「・・・あによ？」

「弱いくせに呑んでくれて。マイコ心配するよ？」

よっこいしょ、と担ぐ。あれ？ 軽くなった？

タクシー止めて、なんとか押し込む。ここからは慣れたもんだ。

ミキのマンション。オレンちよか、絶対家賃高いよな。2DKだし。担いだまま、玄関を開ける。やっぱ、マイコがいる。よく見ると、確かにふさこより一回りチビっこい。

「やあ。久しぶり。おまえの息子、元気だぞ。」 ちょっと不機嫌。しかしかーさんを連れてきてくれた。

背中の子を下ろして、バッグをテーブルに置いて、お嬢さんの様子を伺う。・・・。オンナって、化粧落としてから寝るんだよな。でも、今のミキじゃ、それは不可能だ。

あいかわらず片付いてて、熱帯魚も種類が増えてた。水槽内も、部屋と同じくらいキレイだ。不勉強なオレだけど、水槽をキレイなまま維持すんのって、大変らしい。

「ベッド、連れてくよ？」

服着たまま。メイクもそのまま。てか、なんで、そんなこと、オレが気にすんのかね。

抱き上げて、ベッドに横たえる。

「・・・野上さん・・・。」

「なに？」

「あたしって、ダメなの？」

「ダメって？ つか、もうこんなことはしないって、いつか言っただろ？」

また、くるん、と横になる。猫みたいだ。

「もう、いなくなっちゃうのよね。」

「あと半年、かな。」

くすん。鼻をすするのが聞こえた。

「あたし、1人になっちゃうの？」

「ならねーよ。職場の男子、みんなミキのこと、気にしてるよ？」

「・・・帰らないで。」

「マイコがみてるよ？」

「いいの。側にいて？」

参った。この前とは違う。このまま放っておいたら、消えてなくなりそうな気がした。

ふさこ、許してくれ。

.....

始発で帰宅すると、当たり前のようにふさこが怒りまくってた。悪い。ゴハンだよな。

「夕べ、どこで何してらっしゃたの？」

「すまん。説明できねえ。」

「・・・そお。犬になり下がったのね。あたくしの忠告、記憶から消えてしまったのかしら？」

ぶりぶり怒ってる。

「えーっと、くろちーは？」

「あんなちびすけ、あたくしのゴハン食べて眠ってるわ。それくらいの面倒見れなきゃ、当主として失格でしょ？」

・・・それって、オレに対する批判か。でも、仕方がない。甘んじて受けますとも。

あー、これは全部、オレの妄想会話だから。でも。

ふさこ、可愛いね。

ミキがそれを口にするまで、そんなに時間はかからなかった。

小柄で、スタイルよくって、澄まし顔の美人。まだ20代前半と思っていたが、オレとそんなに違わなかった。

で、社食で、いきなりゼクシィを持ってきた。周囲唖然。オレは冷や汗で固まってしまった。

あー。これはなんだ？ こいつ考えてた以上にお子様なのか？

「なんだよ？」

「あと半年でいなくなっちゃうんでしょ？決めて置く事があるもの。当然でしょ？」

待ってくれ。結婚？ そんなのオレの人生設計にはない。ただ、ふさこくろちーと、平穩に生きることだけだ。

「時間、くれよ。」

「そう。いいわ。」

冷淡な澄まし顔。これがいつものミキ。しかし、これはなんなんだ？あせって、持ってたバッグに詰める。

「なあ、ふさこ。くろちーのかーさん。ヘンなんだよ。」

「あなたって、女心が解からないのね。やっぱりただの犬だわ。」カリカリ。

「でも、オレ結婚とか、そんなの考えてないし。」オレはビールをすすする。

「仕方がないわ。所詮犬ですもの。あたくしにだって解かることがあなたに解からないって、コトバが通じないのと同じではないかしら？」

またもや妄想会話。しかし、本当にそういわれてる気がする。

結婚。両親を見ると、とてもコレはオレに出来ることじゃナイ、と感じてた。なかなか帰ってこないオヤジ。イライラして待ってる母。たしか、見合いで結婚したらしいケド、母を見るのが、子供心に辛かった。

あまつさえ、今やオレは2児の父。このうえ、妻を、なんて、無理だ。

「時間をくれ。」

しかし、ミキはいつまでオレを待ってくれるのか。

なんだか、決して解けないクイズのような気がしていた。

「時間をくれ」

オレはそう言った。だがしかし。半年なんて、夢のように過ぎていってしまう。日々、モニターと睨めっこして、ひたすらキーを打つ。もはや時間感覚もない。朝、携帯の目覚ましで起きて、出勤して、仕事して……。

ミキのことはずっと心に引っかてた。忘れたことはない。でも、仕事が押してきて、あと3ヶ月で、全部の文章を完成しなきゃいけない。オレは所詮兵隊だ。しかし、ここで、キチンと仕事をこなしたことを会社に示さないと、次の派遣先に響いてくる。

すまねー。オレはただの駒だ。いつ、会社に見捨てられても、何の文句も言えない。でも。ミキ。どうしたらお前の幸せになるのか？ 誰も答えてくれない。しかし、オレと結婚しても、シアワセとは思えない。

にゃんこたちは。ゴハンが貰えて、ヤバイ時には猫医者に連れててもらって、後は、自由に生きる。それでいい。でも人間は？

やっぱり、安定した家庭を持ち、子供に恵まれて、平穏な日々を送る。育児や、教育とかあるけど、それは、夫婦で乗り越えるものか。

けど、オレにはそんなビジョンを持ってない。これをヘタレって言うんだな。

そうして瞬間に、契約期間が切れた。

送別会の時、ミキは少し涙ぐんでた気がする。オマケに、泥酔する前に帰宅した。……オレ、振られたんだな。いや、いいさ。ウチにはふさことくろちーがいる。

「くろちー。」もう、去勢手術はしてある。

「おまえのかーさんにオレ振られちゃったよ。」

「しかたねーよ。トーチャン案外ビビリなんだな。」

「そうだな……。でも、おまえは、オレの家族だからさ。」ビールすする。

「誰がかーさんでも、逝く時まで側にいるよ。」

「……。けっ。ニンゲンてなんて頼りないのさ。」

「いあ、本心だよ。信じてくれよ。」

あいも変わらず妄想会話。

さあ、明日からは、サポート業務だ。

サポート業務と言っても、相手はエンドユーザじゃない。職場が売りつけた、企業のシステムに対するサポートだから、ちと、サイズがでかい。

客先も色んなのがいる。銀行、官庁、自衛隊。それから、ふつーの企業。

で、なんか不具合が起きると、電話がくる。もっともバカらしかったのは、プリンタが動かない、と言う案件。相手はお客様だからね。ヘタなこと言って怒らせると、面倒この上なし。

「プリンタが動かない、様ですが、用紙は入ってますか？」これ、基本。

「あっ！」

・・・しばし休憩。

「すみません。紙切れでした。」

これで、案件1つクリア。

オレはこんな程度のシステムに対応できるだけの知識は持っていた。けど、エンドユーザー（コンシューマとも言ったケド）のトラブルに対する知識は持っていない。SEに求められるのは、知識が足りなくてもタッチタイプ出来て、案件をどんどんこなすこと。そのためには若くてタイピングが早い兵隊。それから言うとオレは、会社のお荷物かもしんない。でもね。ウィンドウズ以前の知識をもってたから、なんとか使ってくれてた。

ここは、早ければ7時に解放してくれる。けど、問題が起きれば、大阪とか、ふつーに出張させられる。しかも10時間くらいで帰ってこいって。むちゃだよ。

ウチに帰って、女王様にお伺いをする。

「なー、最近帰り遅くなってるけど、許してもらえるかな？」

「ソレくらいの許容範囲はありましてよ？あなたが働いてくれなければ、あたくしたち、食事もできなくなるのでしょ？」

・・・猫に遣りこまれて、おれはビールすするくらいしかない。

いあ、しかし、これは妄想会話。実際ふさこが話してる訳じゃないし。

でもしかし。ふさこって、絶対こんなコだと思う。

今の職場は3年契約だ。前回の、官庁での文書作成業務に比べると、いくらか余裕があった。それはだって、決められた期日までに、膨大な文書を作成させられるのではなくて、客先からのクレームとか、不具合に対応すればいいだけだったから、あのときのような、切羽詰った環境じゃなかった。

時々、とんでもないところに派遣される事はあったけど、このヘンは企業秘密。決して口にしてはいけない。

でもしかし。

あれは、オレから切ってしまったというのが正しいのか？

他でもない。ミキだ。

今でも、たった数ヶ月、「カノジョ」と呼べる存在がいた時期を思い出す事がある。同時に深く後悔をする。付き合った女は、ミキが初めてじゃない。けど、そんなモンは火遊びと同じで、飽きてしまえば、放置すればよかった。いずれにしても、オレって、モテる男じゃないしね。ただ、自分に対して言い訳をするとしたならば、20代後半の女子のメンタリティを考慮出来なかったコトだ。・・・甘やかな、でも、決して取り戻せないもの。

オレはいい。だって、猫供と、平穏な日々を送られれば、それでいい。しかし、女子は、そんなカンタンなモンじゃないんだらうな。・・・今更になって、気付く。

なあ、ふさこ？

「今更、何を仰ってらっしゃるの？あなたは、犬になったんじゃないですか？ だったら、それなりの身の処し方があるのではなくって？」

くろちーがつぶやく。

「一緒に居たのは短かったけど、カーチャン、優しかったよ。俺、大好きなカーチャンと居られたらなって今でも思うよ。」

カーチャンて、マイコ？

「いや、ミキカーチャン。マイコカーチャンは大好きだけど、ミキカーチャンも優しくて、俺、好きだった。」

あの時、決断出来てたら、今のオレはどうなっていたんだらうか？

ぼちぼち、30の壁が見えてきてる。

ミキは、どうしているんだらう・・・。

ネットゲーム。オンライン上で、アクションRPGをする。

いあ、もっと他にも、色んなゲームがある。フライトシュミレーションとか、自分視点の戦闘シュミレーションとか。

夜の時間潰しに、とあるゲームに手を出した。それは、 β が終わった直後で、料金も決してお値打ちではなかったけど、操作が簡単で、回線も太く（ダイヤルアップからISDNに）したから、なんの問題もナイと思ってた。

けど、PCのスペックが付いていけなくて、定期メンテナンスをDLすると、決まって、PCがダウンしてブルーバックになる。しかたない。オレのPCは年代モンで、キチンとしたグラボを積んでない。

あーあ。もっと低スペックなゲーム、DLするか。料金も破格の安値だったし。

オレの職業は戦士。この先、どうしたって、回復役の僧侶が必要になってくる。LV99までは自力で上げた。時々は通りすがりの僧侶に狩りのサポートをして貰ったが、基本、弱い敵を叩いて、経験値を稼いでた。

狩りの後、少しだけ、チャットする。けど、相手が誰なのかは解からないし、これはそんなもんだと思ってた。

何より、ふさこが、こうやってゲームすることを許してなかった。オレがキーボード操っていると、狙い澄ましたかのようにオレの膝に乗ってくる。で、オレの手に爪を掛ける。

あのさー、浮気してんじゃないんだよ。遊んでるだけ。解かってくれよ？ ある日、運良く、僧侶を捕まえる事が出来た。これで、オレは全開で狩ることが出来る。ま、相手の技量によるけどね。でも、この日は限界の敵と戦っても、なんの不安もなかった。コイツ凄い。まだ、平じゃないか？

「君、ノートなの？」

「え？なんで？」

「動きがナンか違うもん。私、これでも、僧侶の期間長いよ？」

「自分、テンキーないからね。次に逢えたら、なんとかして見るよ」

「多分、僧侶はみんなそう思うとおもうよ。」

それって、キーボード変えろってことか？

まあ、いいけどね。

仕事は、以前と変わって、基本、待ち、だった。何も問題なく終われば、定時に帰れる。しかし、やっかいな案件が来れば、そんな事は言ってもらえない。

とりあえず、客先の社内SEと連絡を取る。こちらの情報は全て伝えて、経過を見る。これで、解決できればラッキー。けど、大概、困惑は混迷を込めて、闇に沈む。仕方がなく、開発元にコンタクトをとる。返事は。

「仕様ですから。」

お前ら、オレらをバカにしてんのか？ 怒りが込み上げてくる。でも、なんとか、トラブルを解消しなきゃ、話にならん。とりあえず、客先のSEと連絡をとって、オレが知ってる知識の限りを伝える。この時点で、待ち、に入る。

言いたかないが、このSEも、ただの兵隊だろう。同じ身分。痛み入るよ。オレはおとなしく客先からの連絡を待つ。相手だって、このトラブルをクリアしなきゃ、徹夜も辞さないだろう。それはオレだって同じだ。

1時間位して、返事が来た。「ありがとうございます！」

よかったよかった。これで、ふさこに怒られる前に帰宅できる。

「良かったですね。私が多少でもお役に立ったみたいで、嬉しいですよ。」・・・取った。この客はこれからオレを指名してくるだろう。これも、仕事だ。

帰宅して、猫供のご機嫌を取る。「なあ、オレがんばってるよ？」

「当たり前じゃなくて？ そんなコトで、あたくしたちのご機嫌を伺うなんて、やはり、あなた、犬ね。」

ふさこの言葉に容赦はない。くろちー？

「や。俺、とーちゃんが早く帰ってくれば、うれしい、ぜ？」

なんていいコなんだ。撫で撫で。あ、でも、最愛のコはふさこだよ？

早く、っても9時をまわってたけど、ネットゲーにログインしてみる。探すと、居た。こないだの僧侶。

「狩り、行く？」

「いいよ。1時間くらいかな？」

オレたちは限界ギリギリの敵を狩りまくる。これも、僧侶がいてくれるからだ。おまけに、僧侶と狩ると、1.5倍の経験値のボーナスが与えられる。

「いつも、ありがとうね。欲しい素材があったら、何でもあげるよ。」

「ううん。だって、私1人じゃ、狩りなんて出来ないもの。連れっけてくれるだけで嬉しいよ？」

「そっか。・・・いつか、ランクが上がったら、また一緒に狩りに行こう。きっといい素材が拾えるから。」

中身(=ユーザー) 女の子かな?いあ、騙されちゃいけね。女性キャラを使ってる男子、いわゆる「ネカマ」ってのが多い世界だ。相手がオンナとオトコか、経験的に、1人称「あたし」って言うのが女で、それ以外は男子比率が高い。

こわいこわい。

そのゲームはある程度LVが上がると、上級職にクラスチェンジできる。ただ、条件があって、ギルドの要求してくる素材を収めないと、昇級できない。オレ、次はナイトだ。その為には、どうしたって、もっと厳しい狩場で、素材を拾うしかない。

別に、信条ではないが、相変わらずノートのままだった。テンキーに魔法(?)を振ればもうちょっとマシな狩が出来る。それは解かっていた。でも、他の職業のキャラがどんな操作をしているのなんて、まったくの想像外だ。

3ヶ月、ソレくらい経ってたろう、また、あの僧侶と邂逅できた。

「自分、あと、素材を納品すれば、ナイトになれるんだ。」

「えー? 凄いじゃん。私も、もっとがんばって、素材集めなきゃ、クレリックになれないもん。」

「クレリックにして上げよか? そのほうが、自分、恩返しできるみたいで、嬉しいよ。」

「ホント? じゃー、巨人の刃が、あと。2個いるの。」

「つことは、巨人の里か。OK, 大丈夫だよ。」

移動しながら自分も、オレの体力回復もする。なかなかの高等技術。しかも、カノジョ(?)は、それを易々とこなす。

「どうして?」

「テンキーじゃないと無理だよ。戦士は別に関係ないけどさ。」

「で、幾つ刃拾った?」

「うふふ。ありがと。これで、転職できる。」

そうして、そいつはクレリックになった。いあ。やはり嬉しい。オレもコレ初めて1年になるけど、基本、他人の為に狩って、自分も経験値貰って。結局はオレの為だし、ね。

ログアウトして、ふさこのご機嫌を取る。

いつもいってるけどさ、これはゲームだかんね?

「いい? コレは遊びだし。」

「そんなことは解かっているよ。でも、あたくし以外に興味に向いていらっしゃるの、我慢できないですよ。」

「てかさー。オトーチャン的に、最上はふさこだよ。解かってくれるよな?」

「どうかしら。ニンゲンって宛にならない生き物ですもの。」

あいかわらず辛辣。や。これはオレの妄想会話だからね。

猫は10歳で人語を解する」これは、とある小説の下りだ。さらに、「雌猫は歳をかさねると、非常にわがままになる」これは、有名作家のエッセイにあった。

新聞を落ち着いて読めるのは、帰宅後だった。もっとも、職場で案件待ちしてる時に、いろんなサイトで、本日のニュースはチェックしてたから、これは、確認作業にしか過ぎない。

どちらの作家の意見が真実だとしても、どうして猫って、新聞広げると、そのど真ん中に、座り込むんだ。

邪魔なんだから。退いてよ。

「あたくし、アナタが何をしたいか、解かってましてよ？」

だったらなおさら、察してくれよ。

「でも、これがあたくしの仕事なんですよ。」

どーゆー仕事だ？

「これは生まれ付きの行動ですよ。だから、アナタもお諦めになさったら？」

やっぱ、にゃんこは解からん。わかるようで、解からないところが、なんだか、もやもやする。例えば頭突き。ふさこのコレは、とんでもなく痛い。全体重を額にのっけて、ずとーん。初めは、何が気に入らんのか？。と思ったが何回かやられてるうちに、コレはコイツなりの愛情表現なんだと解かった。だって、決まって、その後にくるぐるいってるもんね。

他にも、だって、もう十分オトナなはずなのに、何時までも、紐や、紙くずにじゃれてみたり。女王様じゃないのか？

「にゃーん にゃーん。」・・・都合が悪くなると、猫の振りをしてんのかもしれない。

「こんばんは」

ログインすると、速攻コトバが飛んできた。要は、1対1会話。相手の名前さえ分かっていたら、こんな風に飛んでくる。

「やあ、久しぶり。」会話先の相手の名前が表示されてる。スズカ。いつか、昇格させてやった、僧侶、いあ、今やクレリックか。

「ハルカさん、@どのくらい？」

@ってのは、昇格する為の経験値のことだ。

「そっちはいいんだ。ただ、納品素材が揃わなくてね。」

「なにがいのの？」

「死者の記憶。今の自分だと、亡者はツライのよさ。」

「じゃ、死者のダンジョン行く？いまの私なら、絶対力になれるよ？」

・・・そら、剣士と、クレリックだもんね。力関係的に、一流剣客に用心棒させて街道を下る、若武者、って、とこか？・・・どう言う例えだ。

「君が嫌じゃなければ、お願いしたいけど？」

「じゃ、首都の南門で待ってる！」

・・・1時間、キョンシー相手に狩りまくる。これで、100匹は狩ったか？どっちにしろ、回復役がいなきゃ、こんなリスクな狩りは出来ない。

「どおお？」

「あと、一個。あ、出た。」

「わーあああ！おめでとー！」キャラクターアクションのダンスをしてくれる。

「私もううれしいよ。これで恩返しが出来たもの。」

「そか？こっちこそ、助けて貰ってばっかで、ホントにありがたいよ。」

本心。伝わる、といい、かな。

「私ね、エンプレス目指してるの。」ほお・・・。最上級クラスだ。ただ、4次職はまだ日本では実装されてない。

「自分は、せめてパラディンになりたいけど・・・。ジェネラルは夢、かなあ・・・。」

「そんなことないよう。がんばれば、絶対、いける。」

狩りの後、町外れの野原でチャットする。

「自分的に、他人を犠牲にしてランクアップすんの、嫌なんだよね。パラディンって、回復も使えるでしょ？」

「そんなの、ビショップに任せとけばいいのよお。剣士は狩るの。壁になってw」

「壁かw」

「そそ(笑)」

・・・

PCの電源落とす。ふさこは当然のようにオレの膝にいて。つか、おまえ、最近重くなったぞ

?

3年はあっという間に過ぎてしまった。年齢的に、次の派遣先を紹介してもらうには塔が建ち過ぎてた。しかし、運がいい事に、オレの状況を知った本社の営業が、新しい派遣先を見つけてくれた。

そこは、携帯電話のトラブルシューティング。過酷。だって、午後2時過ぎに出勤して、午前組から引継ぎ受けて、夜間のトラブルに備える。何もない夜もある。しかし、携帯の店先でトラブルが起きると、まずはそれを解決して、深夜、顧客の個人情報職場のサーバにきちんと登録する。ミスは許されない。ナントカの守秘義務とかってヤツだ。

終業するのは、朝11時くらい。それからウチに帰って、猫供のご機嫌取って、眠る。で、3連チャン出勤して、2日間休業。最低最悪。曜日感覚もすぐに消えた。けど、オレは分かった。この年齢じゃ、こんな業務が回ってくるのも、ありがたい、って思わなきゃ、ってね。

ネットゲーにログインすんのも、ヘンな時間だった。夜間だったら、スズカに逢えるかもしれない。でも、昼間の微妙な時間に、居るはずがナイ。そんなこんなで、あいも変わらず、ナイトのままだった。素材は集めた。けどしかし。経験値も素材もちと足りない。

そうして今だ。おめでたくも30過ぎてしまった。悲しかったから、29歳最後の日、コーギーコーナーで、一番小さい丸台のケーキを買った。いあ、オレそんなに甘いもの好きじゃないけどね。でも、それ以外に記念になるようなコト、何も思い付かなかったのも、事実だし。

そんな日々が続いてる中で、オレはスズカと邂逅した。

なんて僥倖。けど、スズカはビショップになっていた。

「ハルカさん、久しぶりー。」キャラクタアクションで、笑ってくれる。・・・今日は何曜日なんだ？

「仕事忙しくってさ。ようやく逢えたよね。」

「まだナイトのまんまなんだ。」

「素材足りなくってさ。」

「なに？なにが欲しいの？」

「悪魔の屍。1人狩りじゃ、辛いんだ。」

「いーよいーよ。あのダンジョンなら、私、知り尽くしてるのー。」

ほー。ええなあ。ビショップだからこそ言えるセリフだ。

「付き合ってくれる？つか、1時間くらい？」

「いーのよ。私だって稼げるもの。回復役は壁あってこそだもの。」

んで、2時間。目いっぱい狩る。獲た経験値も然ることながら、スズカの動きは凄まじかった。オマケに、素材も一気に10個拾えたし。これだけあれば、クラスチェンジできる。

「ほんとにありがとう。なんて云ったら、伝わるのかな？」

いつもの街外れの野原。ちまちまとチャットする。

「・・・今度、OFF会があるって、知ってる？」

「あー。でも、敷居高いなー。」

「大丈夫だよー。その時逢えると、私、嬉しい。」

中身がどんなのか、興味があるのは否めない。でも、知らなかった方がシアワセ、って言葉もあるぞ？

「私、OFF会行くの。だから、ハルカさんも来てね♪」

多分。「うん。」と云ってしまった気がする。

X Pが出た時、初めは静観してた。MSのいつもの如く、発売はしたはいいが、その後、v r u pの繰り返しで、完成するまで、時間が掛かる。大体、MEってなんだよ？ヒトによると、「アレは黒歴史だ」らしいが、そんなんで、あいも変わらず、98 S Eを使ってた。

ところが。

事件、つーのは、オレの想定外に起きるものだ。

いつものように、会社のHPを閲覧して、自分宛のEメールを確認する。その時、ふさこがキーボードの上に上った

「お、おいっ！」

運が悪かったとしか言いようがない。P Cの側にビールの缶を置いてた。ふさこはそれを転がして、オレの膝に乗った。

結果。ノートのキーボード部分に、気前よくビールを吞ませる事になった。あせったオレは、モニター側にノートを傾けて、瞬間、脱力した。ノートは、HDとかマザーボードがキーボードの真下にある。こういう場合、エンターキーの方に傾けないと、マザーボードもHDも死んでしまう。

数分。放心した後。明日は何があっても電気屋に行こう、と思った。

「うーん。HDは生きてるかもしれませんが、マザーは死んでますね。」電気屋の修理部門のオイちゃんは冷静に言い放った。

「上手く行けば、HD取り出せるかもしれませんが、マザーが死んでる以上、新しいの、購入されては？」

そりゃそうだ。X Pが出た後、通販でやたら安いP Cを見かける。業務上、すぐに使えるP Cがないのは、不便極まりない。

しかたなく、新聞で見た番号に電話する。やたら愛想のいいねーちゃんが対応してくれた。こちらの必要なスペックを告げると、不安になるくらい、安い価格を告げてきた。しかも納期がやたら早い。

オレが知らないだけで、世の中は進化してるんだらうな。電気屋で買ってもいいけど、値段に負けて、こいつを買った。過去最安値更新。

そして、オレはXPユーザーになった。

以前死んでしまったPCから、多少のデータは引き継いでいた。これは、運良くHDが生きてて、あとは電気屋のオイちゃんの技量だろう。そのHDは外付けのHDに改造してみた。

オレがXPを買った後、ちょっと変わった事が起きるようになった。

新聞で、通販サイトの新作PCのリリース情報が、1面使って表示されてる。そのページを開くと、ふさこが必ずやってきて、キーボードの画像を、手って使って、「パンパンッ」とする。しかも、毎日。

なんか意味あるのか？

くろちーはそれを見ると、真似る様に、やっぱり「パンパンッ」とする。けど、くろちーはあんま感心なさげにスルーする。

「俺は言われてやってるだけだしー。」

誰に？

「ねーさんに決まってるじゃないか。」ペロペロ。こいつはふさこに比べると、しつこいくらい毛づくろいする。おかげで、毛並みはピッカピカだった。

「ふさこがなんだって？」

「あたちの真似しなさいって。それだけだよ。」

「あたち」

ヘンだ。オレの中では、ふさこは自称、「あたくし」だ。

猫飼い始めて、まだ10年は経ってないはずだ。猫供と会話するケド、基本、オレ視点だ。だから、ふさこの一人称は「あたくし」だった。けど、くろちーは「あたち」と言った。

・・・繰り返し言うけど、これは、あくまでオレの妄想会話だからね。

しかし。なにか、別の意識が働いてる気がする。てか。あー。オレは猫バカだからな。こんなの、気のせい。

それとも、オレ、猫の言葉が解かるようになってんのか？

いやいや。妄想だってば。

そいつは、ついにオレの夢に現れた。

枕元にふさこがいた。

「オトーチャン。お願いがあるの。」

は？

「なんだよ？」

「あたり、このお手てじゃ、今のキーボードじゃ、上手くキーを叩けないの。だって、こんなにくきうだよ？」

「・・・オレは何すればいいんだよ？」

「ちゃんとしたの、買って。ちゃんと、数字のキーも別に付いてるヤツがいいの。」

・・・目覚める寸前に見る夢は、大概、夢なのか、現実なのか、区別が付く。じゃあ、これは？

「分かった？ ちゃんとしたの、買ってね？」

猫バカ。それは十分に自覚してる。けど、これは何だ？

1週間。こんな夢を見続けた。いあ、こんなの、悪夢(?)だ。仕事疲れるからな。こんな夢でも見て、気を紛らわせてんだろ。

「ふさこー。」撫で撫で。

「なんか、最近、お前が夢に出て来んだけど。オレの気のせい？」

「さあ？ アナタのことなんて、あたくし存じ上げてませんわよ？ なにかよくない物でも召上ったのかしら？」

そうだよな。ふさこは、ぜったい、こんなコだ。けどしかし、あいかわらず、新聞のPCの広告を見かけると近寄ってきて「ぱんぱんっ！」ってのは変わらなかった。くろちーも右に倅え、だ。

ネトーゲー内には掲示板があって、いつか、スズカがいったOFF会について、盛り上がった。参加表明者が名を連ねる。観てると、割と高位のキャラが多かった。・・・こんなトコにオレが行ってもなあ・・・。そら、プレイ期間は長いさ。けど、それは、今みたいな変則的な勤務になって、誰かと狩りたくっても、だれも知ったキャラがないから、ちまちまと弱い敵を叩いて稼いでた。だから、プレイ時間は長くても、まだ、ナイトのままだった。

スズカはビショップ。あれだけの操作ができたなら、パラディンたちは無視はできないだろう。

中身、女子かな・・・。

だったら、オレどうすんだ・・・？

「こんにちわっ♪」

スズカだ。

「OFF会、どうすんの？」

「いあ、ナイトのままで参加するのって、気が引けるし……。」

「むむ。……@どん位？」

「そっちはクリアしたよ。相変わらず素材で苦労してる。」

「何がいるの？」

「妖精の羽。あのマップ、苦手なんだよ。」

「火属性の武器、ないの？」

「そこまで手がまわんないよ（涙）」

「だったら、私、セカンド出すよ。」

「え？」

「エンチャトウェポン使えた方がいいし、妖精には魔法がよく効く」

「どういうこと？」

「私、1人狩り用に、マナユーザー持ってんの。そっち出すから待っててね」

「って、おいっ！」

そっこー落ちる。セカンドって、つまりメインに育ててるキャラとは別の職業を持たせて育てたヤツ。そりゃ知ってるけどさ。そこまで、このゲームに時間捧げてんのかよ？マナユーザーって、魔術師の3次職でしょ？

確か、魔術師→マジシャン→マナユーザー。4次職はソーサラーだっけか？

「こにちわ！」

スズネ、ってキャラから1対1会話が入る。

「……もしかしてスズカさん？」

「そーよー。妖精の森までは行けるんでしょ？」

「ああ。大丈夫だよ。」

「じゃ、待ってる。」

こりゃ、中身は男だな。確信。だって、メインも、セカンドも3次職なんて。

妖精は、物理攻撃があまり効かない。最適は魔法だけど、武器に属性を付与してくれると、時間は短いけど、ほぼ、魔法攻撃と同じダメージが出せる。

マナユーザーも回復できる。自分も、仲間も。僧侶には負けるが、ステータス異常を起こさせる魔法も使える。スズネの動きも、凄まじかった。殴るしかない剣士とは、最早格が違う。そうして、狩りまくって、全滅させると、次に沸いてくるまで、少し休憩できる。そんなこんなで2時間。

「どお？ 拾った？」

「悪いね、いつも。自分だけが楽しってるみたいで。おかげで全部揃った。」

「じゃ、OFF会来る？」

「もちろん。」

・・・後悔の嵐。けど云っちゃったモンは仕方ねー。ネットゲー内の板の参加者記入欄に追記する。

”参加します。職業、パラディンのハルカです。”

頭の中で、仕事のスケジュールをやりくりする。運がいいのか悪いのか。その日は3連チャンで出勤した後の連休だった。

「野上ふさこちゃん。くろちーくーん。どうぞ。」

定期健診。5歳の頃から年に1回通ってる。くろちーも一緒だ。

2人とも、体重計って、触診して貰って、あと、血液検査。

「血液は問題ないですね。ただ、ふさこちゃん、ちょっと腎臓の数値、今後気をつけないと。」

「どうなるんですか？」 「猫って、腎臓疾患になりやすいんですよ。クレアチニンって、トコですけど、今はまだ若いし元気だけど、例えば、お水をたくさん飲むようになったり、おしっこの回数や量が増えていないか、注意してた方がいいですね。」

「くろちーは？」 「あー、まだまだ若いし、去勢すると太りやすくなるものですが、この体重なら、なんにも問題ないですよ。おとうさんの管理のおかげだ。」

今の仕事で、四六時中容態を管理してやれるのかどうかって、無理、だ。でも、こいつらが苦しんだり痛がったりするような思いはさせたくない。猫貯金、大分貯まってきた。

「ふさー。」帰宅してバッグから出してやると、一目散に逃げ出すところを、はっしと捕まえて、剃り忘れたままのひげ面ですりすりする。

「なにをなさるの！ 女性をなんだと思ってらっしゃるの！」嫌がって、バタバタ。仕方なく下ろしてやる。

「・・・ちゃんと面倒みるから。辛くなったら、いつでも云うんだぞ？」

「なにをおっしゃるかと思えば。そんなことは当然でしょ？アナタはあたくしの下僕ですもの。」ふんっ！

お怒りな女王さまは、しっぽをぱったんぱったんさせて、お気に召さない様子だ。すまないね。キライな病院にも連行されちゃったんだもんな。

あいかわらず、あの夢は見続けてた。それに、「ぱんぱんっ！」も。病院であんなことを云われて、へこんでたが、帰宅すると、電気が点いてたりするのを見る限り、ふさこは元気だ。昼間だと何時だろうと、オレにくっついて床に入ってくるのも相変わらずだ。それと、PCに電源が入ってることも、最早、フツーになっていた。薄気味悪いのは変わらなかったが、PCを待機状態にしとくと、例えば、キーを触っただけで、この画面が出る。多分、そんなところだろ。で、犯人はふさこ。きっと、ね。

大丈夫。大丈夫。

また、あの夢だ。

「おとーちゃん、何度ゆえばわかるの？」　　・・・なんか、いつもと違う？

「あたちまだ、ニンゲンの言葉しゃべれにゃいの。だからこうやって、オトーちゃんの夢の中でしか、お話しできにゃいの。」

「・・・お前、ホントにふさこ？」

「それ以外の誰だってゆうの？ もいっかいゆうよ？ このお手てじゃ、今のキーじゃ、ちゃんと打てにゃいの。だから 早くちゃんとしたの、買って。」

「えーと、テンキー付きのキーボード？」

「なんていうか、あたちあんまり知らない。でも、多分それ。いつもてんてんってしてるやつ。」

しっぽ、ぱったんぱったん。怒った時ふさこがやる仕草だ。ブルーアイで、長毛。で、真っ白・・・。間違い、ない、よなあ・・・。

目が覚めても、釈然としなかった。なんで、猫がキーボード欲しがる？重ねて、スズカの言葉も思い出した。

『君、ノートなの？』

『え？なんで？』

『動きがナンか違うもん。私、これでも、僧侶の期間長いよ？』

『自分、テンキーないからね。次に逢えたら、なんとかして見るよ』

『多分、僧侶はみんなそう思うとおもうよ。』、

・・・別に、夢を信じた訳じゃない。ただ、スズカの言葉とか、この先、狩りを続けて行くなれば・・・、ってことで、電気屋でUSB接続のキーボードを買った。

「にゃーにゃーにゃー！」

ふさこ、なにがそんな嬉しいんだ？しっぽを、ピン！と立てて、すりすり。しっぽ立てるのって、仔猫の仕草だ、って聞いたことあるぞ。箱から取り出して、PCにつなげる。くろちーはキボードに巻いてあったビニールの、カサカサって音にハマっちまって、ずっと、カサカサ、カサカサ、と遊んでる。ノート本体をテーブルの奥に押し込んで、丁度いい具合にキーボードを置いて、PC立ち上げる。すると、とっととオレの膝にふさこが乗って来て、ひげをぴくぴくさせながら、オレがPW入力するのを見ていた。PC立ち上がる。98CEのクセで、アイコンを極力減らした画面が出る。(98SEの頃はリソースで苦労してたからね)すると、ふさこが、ぽん、とウインドウズキーに手を載せた。

は？

ぷにぷにした肉球で、迷わずPを押して「全てのプログラム」の画面を出す。で、矢印キーを

押して、アクセサリで止めて、マウスを動かしてメモ帳を立ち上げた。

・・・なんか、とんでもないものを見てる、気、が、する。そして。
「おとーさんありがと」と入力した。

・・・お前、猫だよな？

”やと、わかってくれたんだね”

いあ、そんな。夢を信じた訳じゃないし。感心な事に両手使ってタイピングする。

”あたしね、ほんとはふさこでないの”

じゃあ、なんなのさ。

”せいやく”

制約？

”そそ。それが、ままにつけてもらたなまえ”

・・・どうやら、ちっちゃい、つ、とか、やゆよのちっちゃいやつ、苦手らしい。

ままって？

”あたちのまま。ここにきたのも、まがつれてきてくれたから”

じゃ、USB付けたのは誰だよ？

”それはおじーちゃん。ままのおとーさん”

・・・そりゃ、猫たちと妄想会話はいっぱいして来たさ。でも、これはなんだ？オレも相当イっちゃてるのか？

”ままはね、おじーちゃんのこと、だいすきな”

ちなみに、タイピングには凄え一時間掛かるし、ミスタッチも多い。

”あたちたちにはなかま、いばいいたの”

いっばいって、どんくらい？

”ままのほかにもおとななひとがいて、おじーちゃんはそのひともかわいがてた”

お前、何で制約って名前なんだよ？

”それは、よくぼうをおさえるため”

欲望？なんだよ、それ？

”わかんない。でも、ままがそういたの”

言ったの？

”うん。で、あたちはせいやくするのがしごとだから”

・・・タイピングする猫。なんか、クラクラする。

「うにゃ？」やと猫らしい声をする。話したいこと、もっとあんの？

”いまねとにさわて、よくぼうがなにしてるのかわかた”

何してんの？

”まだねてる。でもおきたらたいへん。そのまえに、よくぼうをなんとかしないといけないの”

・・・頼む。誰か、これはオレの妄想だって言ってくれ。

”はじめてだから、おとーさんつかれたのね”

もう、ちょっと参ってるよ。

”つづきはまたね。あたちもつらいんだ。ゆめのなかにしのびこむほうがらくだね”

”でも、よくぼうがねとにはいりこんだのはいつなのかわかる”

どういうこと？

”くろちー。よくぼうのにおいがする”

お前がキーボード買えって言ったんだろ。

”そだね。でもつづきはまたこんど。いまはときじない”

時じゃない？

”うん。よくぼうのやつ、まだねてるもん。まだよゆうはある”

こんなこと話して、誰が信用するのかね。いあしかし、誰かに話さないと、オレ、暴走しちゃうよ。

ふさことの会話は、混迷を極めた。だってそうだろう。猫と対等に話せるなんて、想像を凌駕してる。けど、会話は、ゆっくりと進んでいた。

”ままがね、ゆてたの。よくぼうはせいちうするて”

成長？

”はじめはゆくりとねむてて、そのあいだにちからをためるから、ぼうそうするまえにとめるのよ、て”

どうやって？

”わかんない。なんかたりないきがするの。でもおもいだせない。”

・・・ウチに来た時、こいつはちびちびだった。人間だったら2・3歳程度か。それじゃあ、ムリってもんだ。

・・・・・・・・

最近、帰宅してPC立ち上げると、セキュリティソフトが誇らしげにしゃべる。「脅威を感知、解決しました。」ほいほい。オメー高けーもんな。そんな位で威張んな。

ログを見ると、今日もトロイが100匹くらい破壊されてた。なんだ、この数は。出ドコは殆どお隣さんの国だ。あきれよ。今時、トロイになんの対処もしてないPCなんて、とりあえず日本にはいないだろう。しかも毎日だ。つか、オレのPCって、踏み台にされてる？

暇つぶしに、2ちゃん見る。・・・なんだか最近、妙なウィルスが出回ってるようだ。けど、たいした事はない。ただ、一方的に侵入してきて、HPを書き換えたり、画像をいじくる、どっかの誰かさんがやりそーな悪戯だ。今んところ、コンシューマが対象になってるみたいだ。・・・しかし、コレが企業とか、官庁になったら、そら、えらい騒ぎだわな。サポートに当たるSEの心中、御察しいたします。

いずれにしろ、ファイアウォールもセキュリティもガチガチに固めてあるから、オレは大丈夫、と信じてたし。その為に、バカ高いセキュリティソフト入れてるんだし。

ま、今の職場では、そんな案件あろうハズがないので、いわば、対岸の火事だ。

ふさこは、あれからしばらくなんの変化も見せなかった。膝に乗っては来るが、オレの指先にちょっかいを出して遊ぶ以外、何もしなかった。

OFF会。

店はすぐに分かった。改札抜けると。すぐに看板が見える。そらそうだ。だって、県外から来るヤツもいるから、これくらい分かりやすくなければ路頭に迷ってしまう。

時間まで、多少余裕があった。ちょっと考えて、でも入り口に立った。

「いらっしやいませー！」威勢のいい声。

「ご予約で？」「はい。xxの・・・。」「では、こちらへどうぞ！」

座敷席の方を示された。覗くと、10人ほど集まっていた。たしか、今日は25人とか
って……。

え……？

目を疑った。

ミキ。

どうしてここにいるんだ？

「・・・ミキ・・・？」

彼女は、ぽかーん、として。しばらく経ってから、

「野上さん・・・？」

「えー？あなた達、リア友？どーゆーかんけー？」

女供はすぐに騒ぐ。でも、そんなの関係ない。うるさい外野は放置しといた。

「オレさ、ハルカ。」

「・・・あたし、スズカ・・・。」

高慢ちきで、いつもとり澄ましてる、冷淡なミキ。・・・でも何かが変わった気がする。

「隣、いい？」

「かまわない。どうぞ。」

髪が伸びてた。ゆるくカールが掛かってて、印象が変わってる。あの頃、ミキは肩位で切り揃えてて、真っ直ぐな黒髪がキレイだった。左手。薬指に指輪は無かった。

聞きたい事、山ほどあった。・・・あれから何年経ってる？今は何をしてる？何でこのゲーム始めた？それから、それから・・・。なんだか、まだ何も吞んでないのに視界が歪む。胸が苦しい。

「・・・ごめん。」

これが精一杯だった。

「・・・いいの・・・。」

そうして、30年分の勇気を振り絞った。

そっと、でも、痛くないくらいに指をつなぐ。

「もう、離さないから・・・。」

ミキを連れて、早々にOFF会を逃げ出した。あの頃、よく通ってた居酒屋（和風ダイニングとか言うらしい）に転がり込んで、カウンター席に着いた。互いに黙ったままカクテル飲む。口火はオレから。

「・・・今は、何してるの？」

「デパートでお洋服売ってる。こんな歳じゃ、SEとしてカイシャ、使ってくれないから。」
ふふ。微笑む。

「オレはなんとか、業界に喰い下がってるよ・・・待遇は最悪だけどね。」

「・・・くろち一元気？」

「うん。ミキカーチャンが恋しいって。マイコは？」

「あれからちゃんと手術受けて、元気よ。」そりゃよかった。くろち一に報告しなきゃ。

「ミキ、本当にごめん。」

「・・・いってば。あたしも、なんかあせっちゃって、あんなコトしちゃったもん。・・・引かれるの当然、だもの。」

「そんなコトないって。オレにもうちょっと自覚があれば、こんなコトにならなかった。」

「今になって思うの。あたしってなんて不自由だったのかって。雑誌ってコワイよね。も一何歳だからこうだ！みたいなコと書いてあると、そうかなって、思っちゃうもの、でも、ニンゲンって色んな生き方があって、それって、全然、普通だって、野上さんが居なくなってから気が付いたの。」

「・・・オレ、もうちょっと、察してあげればよかったんだな・・・。ごめんね・・・。」

そっと、ミキがオレに寄り添ってくる。

本当に神様が居たとしたなら、これは、いったい、どんな代償を払えばいいのか、尋ねてみたかった。

もう、離さない。絶対。こんな巡り合わせ、神様のプログラムだとしたら、恨むべきか、称揚として受け入れるべきか。どっちでもいい。また、巡り逢えたんだから。

盃、どんだけ重ねたんだろ？でも、どんなに呑んでも、「守ってやらきゃ。」って気持ちは変わらない。

今なら、頓堀でも、なんでも飛び込むよ。ミキが守れるなら。

ウチに帰ってくると、ふさこがすりすりした後、くろちーがやってきて、くんくんと匂いをかぐ。

くろちー。

「ミキカーサンに逢ったよ。マイコカーサンも元気だって。」

「そりゃ、嬉しいね。でも、トーチャン、ゆうベドコ行ってたんだよ？ねーさん、怒ってるよ？」

・・・言い訳のしようがない。

「や、オトナのオトコには、色々と言えない事があるもんだよ。」

「そんな言い訳、ねーさんに通じると思ってんのかよ。オトナのオトコってゆーなら、ちゃんと報告しろよな。俺はしらねーぞ？」

あいもかわらず、妄想会話。ただしかし。ふさこ話すことは、出来ない訳じゃない。

PC立ち上げる。で、メモ帳出してやると、ふさこがとっととやってきた。

”おとーさん、ゆうべはたのしかたみたいね”

皮肉？

”ううん、そんなことはどうでもいいの。さき、すりすりしてわかた”
なにが？

”まえにあちがくろちーのこと、なんていたかおぼえてないの？”
匂いだけ？

”そーそー。いまのおとーさん、すごくにおう。よくぼうのにおい”
意味、分かんねーって。

”ゆうべどこでなにしてきたか知らない。でもよくぼうのにおいがするの”

”きと、ゆうべいたところによくぼういる。はやくつかまえて”

ゆうべ居た所って・・・。

数日後の事だ。運良くミキの休みとオレの休みが合ったので、昼間ランチをした後、セットのデザートを喰らってた。

「なあ。1つ、信じてもらいたいこと、あるんだ。」

ここは、パフェで有名な店。ミキがそれを好きだ、ってコトを知って、ネットで探した店。

「なあに？」

つか、このパフェ、半端ない。オレは、出来たら辞退したい。

「これ。知ってる？」

テーブルに、ふさこが付けてたUSBメモリを置いた。

「ふさこがウチに来た時、首にぶらさげてた。」

ミキはそれに視線釘付けになって、パフェを食べようとしてたスプーンを、カラン、と落とした。なんだ？

「それ・・・知ってる・・・。マイコが持ってきた・・・。」

ウェイターのおねーちゃんが、新しいスプーンを持ってきてくれた。

「マイコ、段ボール箱にはいって、ウチの玄関先にいたの。そのなかに、ソレ、入ってた・・・。」

”おなじにおいがするの”

ふさこのコトバ、思い出していた。

「知ってるって？今も持ってるのか？」

「・・・はじめはナニか解かんなかった。でもPC買い換えた頃に、それがUSBメモリって解かったの。」

「違いはない。オレだってそうなもの。」

「で、PCに挿してみたの？」

「だって、どんなPG入ってるのか、知りたいのはSEの性みたいなもんでしょ？」ソレは否めない。カツ節に集る猫みたいなモンだ。

「何が入ってた？」

「・・・分かんない。ログ調べても何にもわかんなかったのよ。」

「それって、オレの時と同じだ。」

「今さ、ふさこってコがいるけど。」

「覚えてる。長毛でふさふさの可愛いコでしょ？」

「・・・そいつ、タイピングすんだよ。」

「・・・意味、分かんない。」

「アイスクリーム、解け掛かってるぞ。」

「メモ帳立ち上げると、寄ってきて、タイピングすんだ。・・・オレ、正気だよ？」

「解け掛かったアイス、ゆっくりと口に運んで。」

「逢いにいっていい？」

「構わないさ。」

「メモリ、持ってくる」

今、ミキは月、金で休みらしい。そんなこんなで、逢う事を決めた。あと二週間すれば、お互いの休みが合ったのに、ミキは職場の仲間に休みを代わって貰って、やってきた。やっぱ、気になるんだろう。

一通り片付けたところに、ミキがやって来た。心なしか、緊張してる。

「いらっしゃい。」マイコ連れてくんのかな？と、思ったけど、ミキは単身で訪問して来た。

ふさこ、ふんふん、と匂いをかぐ。くろちーは大喜びだ。さんざんミキに頭突きを食らわせて、ラッコみたいに仰向けになる。・・・オトコの誇りって、去勢すると無くなっちゃうのか？

「これ。」

USBメモリ。

「マイコ、玄関先に、段ボール箱に入って、置いてあったの。あんまりちっちゃくて、可愛いから、なんにも考えないでウチのコにしちゃったの。」

「で、箱の中にコレが入ってた。・・・なんだかわかんなかったの。そのときは。」

解かるはずなんてない。コレが公式に発売されたのは96年ごろ。その時、マイコはようやく一歳になったかどうかくらい。

「インストールした時、何もわからなかったんだよね？」

「うん。なんかおっきいPGだったのは解かった。でも、ログ見ても、何にも記載されてなかったもの。」

メモ帳立ち上げる。迷いなくふさこが膝に乗ってくる。

”まちがえない。このひと、よくぼうので一た、ねとにながした。”

・・・「なに、このコ？」うーん。

「なんだか知らないけど、オレよか、ネットに詳しいんだよ。」これが精一杯。

「てか。なんで？って、オレも思うけどね。」

「猫がタイピングしてるって、ヘンよ？」

「オレんちでは、もう、普通。」これ以外にどんな表現がある？誰か教えてくれよ。

ふさこは、くるん、と振り返って、「にやうにやう」としゃべった。・・・オレ的にニンゲンとネコの境目がなくなってるのかもしれない。

”おと一さんのだいすきなひと、きれいね”一丁前にお世辞する。

”ごめんなさい。おね一さんのことしてるわ。ひさしぶりよね？”

・・・誰が見たって、ヘンだ。

「覚えてくれてて、うれしいいわ。オト一ちゃんのことすき？」

”うん。でもね、よくぼう、もう、めがさめてしまったの”

”あたちは、がんばてよくぼうおさえる。それまでにわすれちたことおもいだせればいいけど。”

「あれは、なに？」

・・・そらそ一だよな。オレですら、ホントのどこ、解からん。

「なんだか、使命を受けてる、らしいよ。どうやら、マイコのことも知ってるみたいだし。」

「・・・あのUSBメモリ、そんなPG入ってるなんて知らなかった・・・」

「オレもさ。スズカがちゃんとしたキーボード、買う方がいいよ、っていうまで、ふさこがあんなコだって知らなかったさ。」

「・・・あたしのせい？」

「そんなことは言ってないよ。これはふさこの問題だからさ。」

ふさこが忘れてるコト。なんだか大変な事な気がしてきた。

”便所の落書き”

そう表現したヤツがいた。そうもいえなくはない。でもなんとなく見てしまう。2ちゃんって、そんなものだった。

炎上とは、行かなかったけど、でも、新しいウィルスについて、盛り上がってるスレッドを見つけた。

要は今まで、コンシューマで収まっていたヤツが、企業や、官庁にまで手を出し始めた、って事らしい……。

ソレは手当たり次第に、恐らく、ファイアウォールとか、セキュリティソフトで硬く守られてるはずのサイトをハックして、HPを書き換えるだけじゃなく、個人情報も晒して撒き散らすらしい。喰い荒らす、それ以外にどんな表現があるのか？タチ悪リーな。どーりで、メディアで謝罪してる企業が増えたな、って、畑違いなオレを感じる程だ。

”よくぼうがめざめたの”

ふさこは確かそう言った。しかし、でも、これをやってるのが”欲望”なのか、そんなことはオレには分からない。仕方なく、メモ帳立ち上げる。ふさこはつい、と後ろ足立ちになる。

どう思う？

”よくぼうはせいちうしてるていたでそ？”

今のセキュリティシステム、かなり進化してるぞ？

”あのこにはかんけいない。じぶんがしたいこと、するだけ。そのためにねむりながらちからたくわえてたの。”

ぽちぽちとタイピングする。これ、他人が見たらどう思うのか？

”……いみもりゆうもかんけいない。あたちがとめないと、もと、ぼうそうする”

おまえ、なんか知ってるだろ？

”おいかけてる。でも、つかまえるまえににげちう。こんなこなんてかんがえてなかつた。”

ふさこ、忘れてたこと思い出せないの？

”だめ。よくぼう、おいつめるとふといかいせんのにげこんんで、わからなくなってしまう。こんななら、あたちちからたりないよ”

何とかできないの？

”……まま。ままならわかるかも”

まま？

”あたちのまま。”

おまえをここにつれてきたママかよ。

”そう。ままならきと、してる。どうしたらいいのか。”

て、ことは、ママって、猫？

”あたちのままだから、あたりまえでそ？”

・・・。猫のママが猫って、当たり前じゃないかよ？

その新型ウィルスは、タチの悪いハッカーよりも、さらにタチが悪かった。見境なく、高いセキュリティの壁をあっさり越えて、または、穴から潜り込んで、やりたい放題をする。

サポート業務時代のSEから電話も掛かってきていた。

「野上さん、もーオレらだけじゃどーにもなんないよー。助けてくれよー。」

「つか、今、オレ、携帯のサポートやってるし。動けないってば。」

「解かってるってばー。でも、俺ら誰かに泣き付かないとやってけないんだよー。」

「MSからは情報提供受けてんだろ？」

「もー、それでどうにかなってたら、こんな電話しないってば。」

片付けても片付けても、止まないウィルス。しかも、進化を続けてる……。そりゃ、どうにもならんわな。

悪い、やっぱ、対岸の火事だ。コイツがこっちまできたら、オレも動き様があるけど、基本、顧客第一だ。

「やっぱ、あたしのせい？」

ミキは、携帯の向こうでしおれてた。

「そんなことない。これは織り込み済みな凶事だもの。ミキがアレを手に入れなかったら、きっと別の誰かが同じことしてたよ。」

励ましになってないかな？

「とにかく。アレが“欲望”の仕業ってのは、誰も知らないし、もとのPG作ったヤツの事なんて、もっと知らないんだってば。」

「・・・ホントに？」泣いてるのかな？でもほんとに。ミキは悪くない。

ふさこ。

メモ帳立ち上げる。とっととやってくる。

なんか、世間は大変みたいだよ？

”あれからあたちもいろいろかんがえたの”

なにを？

”やば、ままにあわないと。”

ママが何処にいるのか、ふさこ、覚えてるの？

”うん。おもいだした”

”ついてきて。ままのそこ、いく。”

玄関を開けると、奇しくも満月だった。

「にゃうーん！」しっぽをぴん！と立てたふさこが振り向く。

着いて来て！

猫のしっぽは、感情も思惑も、全て語る。

月下の住宅街。オレはふさこの真っ白白のしっぽを宛にして歩く。しかし相手は猫だ。ニンゲンが通れないかどうかはお構いなしだ。でも、ひたすら、しっぽを追いかけて歩き続ける。

ふさこの白い被毛。それが月光を浴びて、銀色に輝く。目当てはそれだ。ソレだけを頼りに、いったいオレはどれだけ歩いたのか？

そこは、打ち果てられた住宅だった。20年位前なら、「新型」のマイホームとして広告打たれてた、そんな建物だった。

玄関先でふさこが「にゃーんにゃん」と鳴く。なに、どうすればいいんだよ？

オレの顔を察したのか、玄関先のポストの上に飛び乗る。「にゃーん、にゃにゃん。」探れって？

ポストの中は投げ込みチラシとDMで一杯の状態だった。辛抱強く一つ一つ取り出す。

あった！なにか、金属質な物。

「鍵？」

「にゃんにゃん」そーそー。

促されるまま、鍵を住宅の鍵穴に差し込む。

かちん！

ドアが開いた。

「にゃうにゃう！！」まーまー！！

「あら、久しぶりね。私の愛しいコ。」

ニンゲン？ いあ、間違いなく、ヒトの声が聞こえた。

「おまえはパパの血を受け継いだのね。こんなに可愛らしいなんて、私、嬉しいわ。」

荒んだ住居。その窓辺にその声の主がいた。窓辺に横たわっている。

三毛猫。素晴らしく美しい。月光を浴びながら、ふさこの額を舐めている。

ちょっと、待て。猫って、ニンゲンの言葉、しゃべるのか？

「驚いてるようね……。しかたないわ。」

月光の元、輝く毛並み。瞳がキラリと輝く。

「あなたも猫飼いなら、知ってらっしゃるでしょ？私たち、10歳を過ぎたら人語を解するの。」

解する、って、解かるってことだろ？話すなんて・・・。

「人語を話すって、聞いた事ないです。」

「そお・・・。でも、それはニンゲンが知らないだけ。私たちは話す事もできるのよ。」

「ふさこはまだ子供だから、キーでしかお話できないの。でも、あと10年もすれば、あなたの話相手にはなれるわ。」

老貴婦人。この表現で伝わるのか？そのくらい、この三毛さんは気高く、美しかった。

「あまり時間がないようね？」ペロリ。貴婦人は手先を舐める。

「あなたを選んだのは、私のおとーさん、博士の要求なの。」

「博士？」

「博士はね、ずーっとアメリカで研究をしてたの。今で言う、インターネットのね。」

「でも、初めはネズミサイズで満足してた。でも、博士はライオンにも挑戦したくなったの。」

「ネズミって？」

「例えば、大学とか、省庁とか。閉じられたネットワークよ。」

「博士は、これは絶対世界に広がるだろうって。でも、理解してもらえなかった。」

それで？

「帰国してから私たち、猫を飼い始めたの。」

三毛さんの声は、とても上品で、子供の頃憧れてた声優を思わせた。美しくて、儂い。ただ、お年を召したせいか、身動きできない。

「ちっちゃい頃は博士がなにを考えてるのか解からなかったわ。」

「でもね。博士はアメリカに捨てられても、自分の研究を続けてたの。」

ふさこは、大きな図体をしているのに、ママに額を舐められて、ぐるぐるいっていた。そか、そんなに嬉しいんだ。

「初めに作ったのは、ネットワークを巡回する、簡単な監視ソフトだったの。」

「それが、制約？」

「いいえ。それだけでは不十分だから、学習機能を付けた。それで、ウィルスに対する攻撃力を備えたPGを作った。それが制約よ。」

「じゃ、欲望は？」

「博士はね、自分が作ったPGを凌駕するものを作りたかったのよ。制約は既に出来てる。だから、先にそのコをあなたに委ねたの。」

なんて、無責任なんだ？・・・でも、解からなくはない・・・。

「もちろん、制約にも学習機能は付けてた。でも、それだけじゃ物足りなかったのね。」

「ふさこはあなたの子供なんですよ？」

「あら、自己紹介してなかったわね。私、マサエっていうの。博士の奥様の名前頂いたの。」

「私、3匹産んだけど、生きてたのはこのコだけ。それをね、制約のPG詰めたメモリを付けて誰かに預けて来いって、博士に言われたから、あなたに託したの。」

「なんで、オレだったんですか？」

「・・・うふふ。だって猫好きなニオイがしたもの。」

「なんで、そんなツライ命令に、従った、のさ？」

「博士は優しくったわ。もう、それだけで十分。」

「欲望はね。博士もいろんなコト試したかったらだと思ふ。だから、制約をつくったあと、何年か掛けて、いろんなオプションつけたの。」

「今や、それでネット炎上してるよ？」

「・・・それも、博士の計算道理でしょう。でもね。欲望のPG渡されたグレースは怒ってた」

「グレースって？誰？ど、どうして？」

「考えなくても解かるでしょ？だって、そのために、可愛い子供たちを差し出さなきゃいけなかった。」

「グレースは羨ましいくらいに美しい黒猫だった。生まれた子供達の中で、一番ひ弱なコに言われるままPGを持たせて博士に差し出したの。そのあと、グレースは子供たちと一緒にいなくなったわ。」

グレース。そういえば女優にそんな名前を思い出した。たしかどっかの国の王妃になったんだっけか。

「今やあなた、手詰まり、ってところかしら？」

「なんで？」

「そりゃ、こうして、私の娘を連れてきたんですもの。言ってなかつたかしら？どうしても困った時はママのトコにいらっしゃいって。」

「にやう！」ふさこ、返事する。

「博士はいまどこに居るんですか？」

「なんとかって、施設。たぶん、私たちを見ても、何にも思い出せないでしょうね。ニンゲンって哀れだわ。」

マサエさんは、くいつ、と首をかしげる。そうして、右手を舐めると。

「欲しいんでしょ？」

「な、何ですか？」

「ちびの話聞く限りじゃ、あなた、いい人みたいね。そうじゃなかつたら、私、何も話さ

なかったわ。」

「これが”審判”のPGよ。誰も傷つけない。ただ”欲望”を追いかけて永遠に眠らせるのよ。・・・でも、使うかどうかはあなたにお任せするわ。」

マサエさんは横たえてた身体の下から、USBメモリを取り出した。口に咥えてオレに差し出すと、

「どっちも、私の子供の様なものよ。どうしたら、みんな幸せになれるか、よく考えてね。」

「どっちも、私の子供の様なものよ。どうしたら、みんな幸せになれるか、よく考えてね。」
・・・。私の子供。オレにしてみれば、ふさことくろち一だ。あの、美しいマサエさんにとっては、3つのPG，全部が自分の子供だと言ってる、様な気がした。

”審判”。重すぎる名前。ただ、恐らく、その辺のセキュリティソフトなんか足元の及ばない力を秘めている。だって、”欲望”対策の為に特化したPG。”制約”が軌跡を辿れるように、”審判”は確実にヤツを追い込んで、”永眠”させる。

小市民なオレは、とりあえず、PCをネットから回避させるため、ケーブルを抜いた。で、じくじくと考える。

どうして、マサエさんはあんなに博士の事を愛してるのだろう。

『優しくかったから、それで十分』

そんな理由、辛すぎるよ。それが、オレとミキの関係だったら、ミキはオレの事、
『優しくかったから、それで十分。』って言ってくれるのか？

いあ、それは違う気がする。優しいだけじゃ、何も記憶に残せない気がする。オレがミキを忘れられなかったのは、あの時、決断できなかった自分が情けなかったからじゃないか。

でもしかし、それって、自分に対する言い訳な気がする。ミキ・・・。

「こないだ、ふさこのままに会ったよ・・・。」

休憩時間。最早夜の9時回ってる。業務用携帯、ホントは使ったのがバレると始末書モンだ。

「今回の対処用のPG，貰ったさ・・・。」

「今の混乱、抑えることが出来るの？」

「多分ね・・・。ねえ、ミキ？」

「・・・なあに？」

「どうして、オレの事、待っててくれたんだ？」くすっ。笑顔が想像できる様だ。

「だって、時間くれて言ったじゃない。」

「・・・あたしも残酷よね。でも、マコト、あたしを待っててくれた。だから、信じてた。」

「それだけ？ オレが居なくなる事、考えなかった？」

「あたしみたいなオンナ、待っててくれるの、マコトしか居ないって。」

一晩、ベッドで唸ってみた。マサエさんの言葉が繰り返し胸に響く。

『優しくかったから、それで十分』

そんなことで、猫は飼い主を許すのか？・・・じゃ、オレは？

ミキは、オレを待っててくれた。それは”愛”とかってコトバで表現されるものなのか。でもしかし、マサエさんにとっては、3つのPGは、それぞれ、皆自分の子供、って、言ってるような気がした。

『どっちも、私の子供の様なものよ。どうしたら、みんな幸せになれるか、よく考えてね。』
ベッドを這い出す。PC立ち上げて、メディアプレイヤーで好きな曲を掛けてみる。エニグマ。
深呼吸が出来る感じだ。

全てのコが幸せになる、って、どんな状態を言うのか。解かっているのは、“制約”“欲望”“審判”それら全てを産み出したのは同じ博士だってコト。そっか、オトチャンはみんな同じなんだ。それって、3人のやんちゃなコどもを抱きしめる母のようなものか？

SEのサガとして、悪意のあるウィルスは全滅させる、ってのがある。たしかに“欲望”は悪意の固まりだ。でも、基本的に、「博士」が自分のスキルを確かめるために作られた子供。そうして“審判”を作った……。

技術者としてそれは凄くわかる。最先端の場所において、自分がどこまでいけるのか？ それを探りたくなるのが技術者の悪い癖だ。だって、どうしてオレがココにいるのかって、ガキの頃見た洋画で、ハッキングしちゃう主人公がカッコよくって、オレもそうなりたいって思ったことがあるからだ。ただ、皮肉な事に、今やハッカーからの攻撃に耐える仕事、してるんだけどね。

マサエさん。あなたが母ならば。きっと全ての子供たちを抱きしめたいと思うはず。それが、最愛の子供を永眠させる事になっても……。

グレース。逢ったことはないケド、あなただって、そう思うよね？自分の子供が悪さをしてたら、ぴしっ！と叩いて、そのあと、優しく舐め舐めしてやる。

そうやって、うじうじ悩んで。でも、PCをネットに繋げる。本当はなにが真実で、なにが正しいのかわからない。でも、マサエさんや、グレースの気持ちを考えると、もう、これしか考え付かなかった。

そうして、オレは、“審判”のPGをネットに流した。

最終話

”審判”をインストールすると、即、”問題のあるプログラムをトレースします”と、メッセージが出た。インストールしたのは夜勤明けで、眠る寸前。2・3時間眠って、ふと起きると、モニタにメッセージ。 ”問題のあるプログラムを発見しました。これより排除します。”

排除って・・・。なんかフクザツ。もっと他の表現、あるだろうに。しかし、容赦はなかった。

それからまた眠って、昼前、モニタを確認すると、”問題のあるプログラムの排除を完了しました”ってな。

それから、半月はたったのか。習慣で2ちゃんを見る。もはや、あのウィルスのスレッドは閲覧不可になっていた。メディアを見る限り、もはや、アレは無かったことになっているし。

また、同じ店でランチする。

「・・・解決、したよ？」

今日は、チョコレートムースと、アイスにフルーツ。で、生クリーム。盛り盛り。

「マサエさん、どうしてるのかな・・・？」

「あれから、もう一度行こうと思ったんだけど、ふさこも、ふつーの猫になっちゃってさ、なんにも覚えてないみたいなんだ。」

「マイコ、グレースのコト話したら、ちっちゃく泣いてた・・・。」

最早、猫バカの会話だな。

「オレって、マサエさんが悲しむようなこと、したのかな・・・？」

「・・・そうね。でも、自分の子供たちを抱きしめる事って、シアワセだと思う。」

猫貯金、少し崩して、あとはオレの蓄えを足して。そしてそれは、ミキの左の薬指に輝いている。何も約束はしていない。でも、雄猫がマーキングするみたいなものだ。”こいつはオレのもの” 宣言。

守りたいもの。それがあれば、ヒトはどんな過酷な環境も、耐えられる。

『優しかったから、十分。』

いや、それだけじゃないでしょ？自分のこと、愛してくれてるの感じたから、マサエさんは博士に従った。

オレがミキの為に出来ること。

精一杯、愛する。何もかも受け入れて、全てを許す。そして半年後。

拳式を上げる時、マーメイドラインのドレスを着たミキは、誰よりも美しかった。オレも胸を

張る。フラワーシャワーを浴びてる時、ミキが泣いてることに気付いた。ぎゅ、っと手を握る。オレも泣いてた。でもそれは、これからやって来る未来に対してオレ的に覚悟を決めたからだ。親戚も、友達も皆祝福してくれてる。そう。オレはもう1人じゃない。

一緒に歩いて行こう。どんなに辛くても。 ミキと、猫たちがいれば、それで十分だ。